

御所流れ 〈2〉

ふるさと御所 歴史探訪

先月号で、「御所流れ」の被害は、言い伝えほど大きなものではなかったと書きました。ところが発行直前に、丹波・福知山の洪水、広島土石流の被害等が発生しました。そこで、ごく最近の状況と江戸時代の状況について考えてみることにします。

私は15年ほど前まで、化学工場の建設の仕事をしていました。その当時の降雨量の設計基準は、1時間に最大50mmの雨が、2時間連続ということでした。これで、問題がなかったようですが、江戸時代の気象状況も大差はなかったと思われる。

ところが最近では、1時間に100mm以上の雨が降り、各地で被害が出ていま

す。これは、温暖化によるものとされ、その温暖化は、二酸化炭素の増加が原因の一つとされています。江戸時代には、燃料として薪・木炭等を使っていましたので、二酸化炭素が増えることはなかったのです。

もう一つの要因として、山の保水力の低下が考えられます。ウィキペディア（インターネット上の百科事典）には、1950年代から1970年代前半に空前の住宅建設ラッシュが起り、人工林の植林が行われたと書かれています。ところが近年、輸入材との価格差により、国内産の材木が使わなくなり、放置されている山が多いのです。

話を元にもどし、まず「六軒町伝説」が、いつできたかについて考えてみます。今年1月号で示しました寛保2年（1742）の検地絵図では、「六軒町」は、現在の「御堂魚棚町」のところに書かれています。明治8年（1875）の反別帳では「六軒町通り」として175間（315m）となっています。すなわち、当時の六軒町は、本町通りの1つ北の通りの端から端までだったのです。

明治23年（1890）の「実測全図」（市役所所蔵）では、六軒町は今の場所になって、町名はブロックで決められています。これらのことから、六軒町伝説は、町名がブロックで決められるようになった明治23年以降にできたと考えられます。

次に当時の洪水に対する考えを説明します。洪水がよく起こったのは、葛城川と柳田川の合流点



写真1

の東側だったようです。そこで、堤防が切れても住宅地に水が入らないように東御所には「請堤」というものが設けられていました。検地絵図のその部分を写真1に示します。水に浸かった田畑は、年貢を免除し、正常に戻っても「起返」として、しばらくは年貢を減額していたのです。これが、当時の洪水に対する対応です。

ところが御所流れは、葛城川の西側または柳田川の堤防が切れ、西御所の住宅地が浸水したのです。想定外ということになります。これが大洪水とされた理由の一つです。

この洪水によって、ある文書が紛失したと書かれています。が、同じ家に、洪水より古い文書が残っていますので、疑わしいと思います。また、先月号で、葛城川の改修の申請に、被害について大きな数字が書かれたと説明しました。このように、御所流れが利用されたようです。

現在のJR和歌山線は、明治29年（1896）に「南和鉄道」

として開通しました。葛城川の鉄橋の東に写真2に示す「ろくすっぱ」といわれる構造物があります。これは「6スパン（間隔）」が変化したものと考えられます。堤防が切れたとき、それまでと異なり、鉄道の左右のどちらか一方が被害を受けるのは不公平であるとして設けられたと聞いています。当時の洪水に対する考えを示す興味ある遺産だと思われます。

一般的に、言い伝えは大きなものなのです。しかし、我々人間は、自然に対して、無力であることを認識しなければならぬと思います。

（文責 中井陽二）



写真2